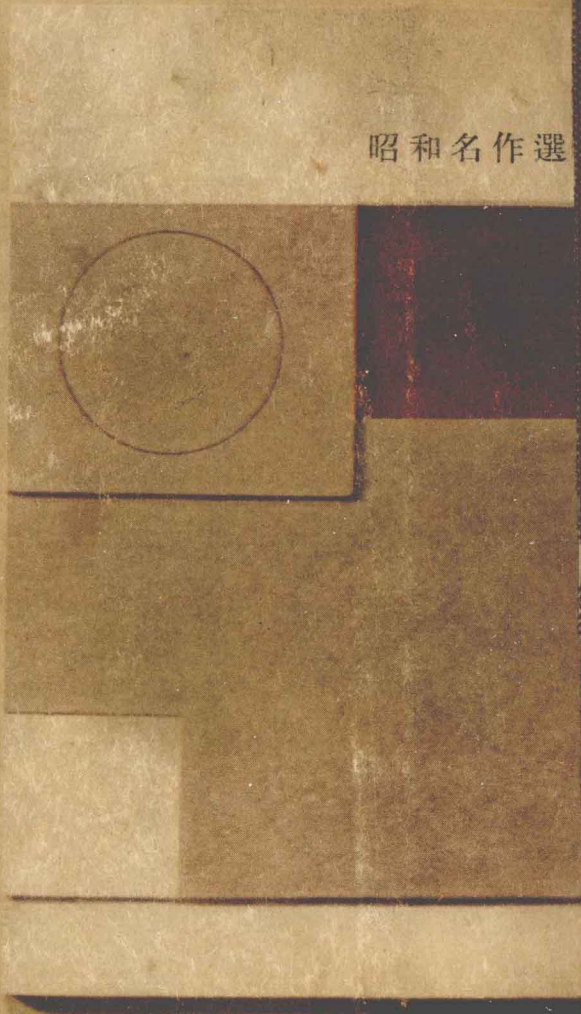


海に見える町

伊藤 整 著

昭和名作選



新潮社版

伊 藤 整 著

海 の 見 え る 町

昭和名作選

2

新 潮 社 版

昭和名作選

海に見える町

昭和二十九年七月四日 印刷
昭和二十九年七月八日 發行

定價 貳百參拾圓
地方
賣價 貳百四拾圓

著 者 伊 藤 整

發行者 東京都新宿區矢來町七一
佐 藤 義 夫

發 行 所 東京都新宿區矢來町七一
株式會社 新潮社

電話東京三四局代表七一(一八)
振替東京八〇八番

亂丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替へいたします。

印刷 二光印刷株式會社 製本 大 進 堂

Printed in Japan

目次

子供暦

三

海の見える町
雪の來るとき

三

七

*

文學祭

二

山羊と私

三五

犬と私

一三

イタガキさんと

ニシガキさん

一四

こぼれたミルク

一五

*

生きる怖れ

一六

たはむれに

一七

ある女の死

一八

*

童女の像

一九

解説

中村光夫

子

供

曆

その山間の分教場は、文字どほり人里離れたといふ感じのする場所にあつた。ここから西の方に一里ぐらゐの所に、砂谷村といふ人口三千人ぐらゐの古くから開けた漁村がある。その村の海に注ぐ砂谷川に沿つてさかのぼる街道が、低い山の間をうねつて東の方に續いてゐる。その水源に近い三方を山に圍まれた場所が、この分教場のある所で、徳助澤と言ひ、農家があちこちの谷間に合せて二十軒ほどある。その子弟が、一里離れた本村の砂谷村の學校に通ふのは、雪が四五尺も積る冬は勿論、夏期でも容易なことではない。その爲に砂谷村小學校の分教場が、この徳助澤に置かれてゐた。

しかし、この分教場の北方に見える、その斜面がほとんど畑になつてゐる五百尺ほどの高さの山を、細い、馬の通れるほどの道で三十分あまりかかつて越えようと、海港の小樽市に出る。人口十萬ほどの、船員と商人と漁夫が行き來し、商店と船會社と遊廓の發展してゐる賑やかな町である。だからこの部落はさう不便な場所ではない。この山越えの道の丘の頂きに近いあたりに「高の山田さん」と呼ばれてゐる農家が一軒ポツンとあり、またその手前の中腹邊に「下の山田さん」と呼ばれる農家があるだけで、外に人家は無い。また小樽の側へ下りてから半分ほどは、落葉松の植林の間の道であるから、夜間や雨雪の場合には骨の折れる道である。

五郎の父の伍助はその分教場の教員である。彼は廣島縣三次在の農村の出身で、軍人の經歷を持ち、

日露戦争に出たあと三十歳をすぎて「靜かに暮したい」といふ小さな希望を持つてこの開拓地の山間に住みついたのである。子供は三人、七歳の鈴子と五歳の五郎と三歳の廣とがあつた。廣が病弱であつたので、母のタミ子はしばしば廣を背負つて小樽の醫者へ通つた。その道を通つて、五郎も何度か父に小樽へ連れて行かれた。この徳助澤のあちこちに住んでゐる農家は、野菜を小樽に供給するので、馬の脊に振り分けにつけた籠で、この山道を越えて毎日のやうに運んでゐた。ある時五郎は、ふだん彼が遊びに行つてゐる分教場のすぐ近くの岡島の爺さんと婆さんが、馬の兩側に大きな籠をつけてこの山道を小樽の方へ登つて行く時、二つの籠の真中の馬の脊に乗せられて、「下の山田さん」のあたりまで行つたことがある。

「ほら、五郎さん、ここで下りて家へ歸りなさいな。」

さう言はれて、馬の脊から下されたが、五郎は承知しなかつた。小樽まで行くと駄々をこねた。山の向ふには、美しい賑やかな町がある。店には色々なものを賣つてゐる。海があつて大きな汽船が浮いてゐる。さういふこの都會についての記憶が、五郎の心の中に、美しい夢になつてゐた。

このまま馬に乗つて、山を越えて、賑やかな町へ行きたい、といふ心から、日の照つた坂道のほとりて、駄々をこねた。そこまでは五郎は記憶してゐる。後年母が話してくれたところによると、「下の山田さん」のあたりから、岡島の婆さんは、母を呼んで迎へに來てもらつたさうである。

「奥さあん、五郎さんがのう。」

福井縣から移つて來た人である小柄な岡島の婆さんは、よく透る聲で、向ふの山の中腹から、谷の底の日向にある小さな分教場の方に聲をかけた。

時々山の向ふから、船の汽笛がボーンといふ間の抜けた反響を響かせるほか、しんと靜まりかへつてゐるこの山の中では、人の聲は五町も六町も先まで届くのである。ちよつと間があつて、岡島の

婆さんの口から出た聲が、風のない暖い空氣の中を泳いで分教場の開いた戸口まで届いたと思はれる頃、二十五六歳の若い細君である五郎の母が戸口に現はれて、

「はあい、そこへ置いてつて下さいやあ。」と言ふ。その聲が波紋のやうに谷間一杯にひろがつて、馬と爺さんと婆さんと五郎の立つてゐる杉の木立のある「下の山田さん」のあたりへ届いたと思はれる頃、婆さんは、こつくりとうなづく。そして、

「ほうら、五郎さん、お母さんが來ましたわいな。」と言つて、この子を置いて行つたものか、奥さんが来るまで待つてゐてやつたものかと思ひ迷つてゐる。菅笠に脚絆といふ古風ないでたちの、頭の禿げた身體の大きな爺さんは、馬を追つて先に坂を登つて行く。

タミ子は、岡島の婆さんにも困つたものだ、甘やかしてばかりゐるから五郎はますます手のかかる子になつた、と思ひながら、坂を登つて行く。泣いてゐる五郎のそばに、手拭で髪を包んだ上に笠をかぶり、手には手甲をはめ、足に脚絆を卷いた、色の黒い、皺だらけの顔でにこにこ笑つてゐる岡島の婆さんの小柄な姿がある。

山を越えて行くと、美しい町がある、といふ氣持が、この谷間で育つあひだの五郎の夢想の源なのであつた。馬の脊でこくりこくりと揺られながら、町へ行きたい、しかも父や母のやうに自分を束縛することのない岡島の爺さんや婆さんに連れて行つてもらひたい、さう思つたその時の氣持が、後までも五郎の記憶の中に残つた。他人が親よりも自分を甘やかせる。その底にある他人の無關心とか氣まぐれの實體、無責任な愛情といふものの冷たさには五郎は氣がつかず、こんな風なら父や母よりもこの人たちの方が、自分を楽しい目に逢はせてくれさうだ、と思はれた。

その道は、兩側の藪の繁つた間を、赤土の色をはつきりと見せて、少し左右にうねりながら、日に照らされて、ずつと山を登つて行つてゐる。まことに、その山のかげには、どこか知らぬ海の向うか

ら來た汽船が浮いてゐたり、塀をまはした立派な家や、赤い布のたくさんぶら下つてゐる店や玩具や繪本などを並べて無限に續いてゐるやうな細長く奥深い勸工場（百貨店風の市場）があつたりする。何かしら、ここよりも良い事がそこにはある。五郎にとつては、後年も、詩的な夢想の中で浮ぶ山は、ちやうどそれぐらゐの高さで、それぐらゐの丸味を帯びた、なだらかなものでなければならなかつた。後年彼は外の土地へ旅行しても、ふと低い丸味を帯びた山や、そのかげにひっそりと目を浴びてゐる農家などを見ると、心が暖く、眠たくなるやうな幸福感到落ち込むのであつた。それよりもずっと高い山だつたりすると、山岳といふ風な冷たいものを感じる。それは畏怖といふのに近い氣持だ。また、低い山でも、それよりも急で、杉などの暗く繁つた關東地方の山だつたりすると、何やら襟もとが寒くなるやうな氣配を感じて、落ちつきを失ふのである。

二

どういふ理由で父がこの分教場に勤めることになつたか、五郎は分らない。父得能伍助は、日露戰爭に出征し、旅順の二〇三高地攻略戦に加はつて重傷を負ひ、特務曹長から少尉に進み、金鵄勳章をもらつた。後奉天方面の戦にも加はつたが、平和恢復の後、軍を退き、再び以前の職業小學校教員に戻つたのである。

戦後はじめて勤務したのは、砂谷村の西の六里ぐらゐの處にある、人口二萬ほどの余市といふ林檎の産地として有名な町であるが、そこにゐたのは、ほんの一年ほどで、この山奥の寂しい分教場へ自分自ら好んで移つて來たのである。父伍助は、近衛師團に屬した下士官であつたが、日清戦役に臺灣征討に加はつた。戦後休戦になると、同僚二人と誘ひ合せ、海軍の測量船に勤務して北海道に渡り、

そこで小學校の教員になつたのである。靜かだといふ點では、この徳助澤以上に靜かな場所は考へられない。生徒の數は一年から六年まで合せて三四十人で、それが一教室に入つてゐるのだから、仕事そのものが「靜か」であるとは言へないだらうが、世離れた、うるさくない世界として、多分こは伍助の氣に入つたのであらう。そして三四十分で、繁華な小樽市へ出られるといふ便宜もまた併せて考へられた條件であつたらう。

後年五郎が、昔のことをあまり話したがらぬ母から聞き出したところによると、この徳助澤の生活は「本當に金がかからなかつた」さうである。伍助には、收入としては、多分この山間での生活がどうか成り立つだけの月給の外に、軍人の恩給と、金鷄勳章の年金とを持つてゐた。だから、さういふ境遇にゐる外の教員の倍ぐらゐの收入があつた。二年後に伍助が、砂谷村にささやかながら土地を買ひ、家を建てて引越すこととなつたのは、さういふ生活の餘裕のさせたことであつたのだらう。

徳助澤は、多分徳助といふ男がはじめ開拓した土地なのであらう。この村には、外にも太右衛門澤とか樽屋の澤とかいふ小さな谷間があちこちにあつて、そこをはじめて開いた人間を推定させるのである。たとへば、樽屋の澤には樽屋といふ姓の家が今もある。しかし、徳助澤の開拓者であつた徳助がどういふ人であつたか、その人の子孫はどうなつてゐるかは、全く傳はつてゐない。人はみな時の流れの中に失はれて、無意味な符牒としての名だけが残る。鯉漁業地の砂谷村が、維新以前から松前藩の植民地のやうな形で繁榮してゐたため、それに附屬した耕作地であるこれ等の「澤」は、やつぱり早くから人が住んでゐたのであらう。また砂谷村は、函館から小樽、札幌を通つて奥地に通ずる國道沿ひの地であつたため、明治になつてからの開拓時代に鐵道が通じるまでは、この沿道は旅行者、移住者が多く通つた。だから住みやすい谷間などは、随分早くから耕作者が入り込んでゐたのであらう。

伍助が教員としてここへ来た時、分教場のすぐ附近には五六軒の農家が住んでゐた。一番近いところにあるのが、岡島の老夫婦の家である。この人たちは福井縣から移住して來たのだが、老人夫婦の間に長男が居り、それに嫁がゐた。そして清ちやんといふ孫が十二三歳になつてゐた。小樽へ越す坂の途中にある二軒の山田家はこの岡島家の親戚であつた。また岡島家から少し向ふの杉木立のかげには、中西さんといふ人が住んでゐた。この人は、その頃四十歳ぐらゐであつたらうか。中西さんは「ヤソ」だといふことであつた。頭は大分禿げてゐるが、頬の赤い面長の人で、時々分教場へ來て伍助と話してゐた。

「中西さんは學問のある人であつたさうだ。」と後年タミ子が五郎に言つたことがある。息子や娘は東京や外國にゐるといふことであつた。中西さんの家のもつと奥の方には、五郎の家の子守の芳子の家があつた。そこは大分遠い森の間を抜けてゆく淋しいところで、一度五郎は芳子について途中まで歩いて行つたが、おつかないから歸らうと言つて、芳子にせがんで戻つて來たことがある。多分その時、芳子は五郎の守をしながら家へ歸つて見たくなつたのであらう。その頃芳子は十五歳ほどで、色の黒い、目の細い、しかしととのつた顔だちの娘であつた。

その外にも、本村の砂谷村とこの徳助澤との中間で、本村に出るには遠い農家が十數軒あつて、その子供たちは、この分教場へ集るやうになつてゐる。岡島の清ちやんが五郎と一緒によく遊んでくれた。五郎には、同年配の友達が無く、六つほど年上のこの清ちやんが、ほとんど唯一の友達であつた。

ある日、その時も暖く日の照つてゐる時であつたが、彼は岡島の家のある高さ三四尺の、土を削り取つたところで、清ちやんと遊んでゐた。清ちやんは馬の蹄鐵を入口にしてトンネルを作つて見せた。赤土に穴を掘り、その入口に蹄鐵をあてがふと、トンネルとそっくりの形になつた。

それを面白いと思つた時、すでに五郎はトンネルといふものを知つてゐた。ああ、これはトンネル

だ、とすぐ理解することが出来た。トンネルは、砂谷村から小樽市へ通じてゐる汽車の沿線に二つあった。その線路は、徳助澤から砂谷村へ出る道を、砂谷村に近いあたりで横切つて、徳助澤の北側に續いてゐる山のかげを、小樽市へ通じてゐた。國道もまたその鐵路と平行して山の向ふ側を通つてゐるのだ。徳助澤は、ただ山一重南側にあるといふだけで、その交通線とは別な世界になつてゐた。多分五郎は、幾度か砂谷村へ連れて行かれたり、汽車に乗せられたりしたのであらうが、それを彼は記憶してゐない。しかし、何時感じたとも分らず、汽車に乗つて、それが騒がしい音を立てて暗いトンネルに入つたり出たりするのに胸をとどろかした楽しさを記憶してゐる。これが汽車といふものだ、と切實に感じた最初の経験である。だからこの時馬蹄で出来たトンネルを見て面白いと思つたのは、その経験より後のことになる。この赤土の底をずっと掘つて行つて、どこか向ふ側までこのトンネルを續けたら、どんなに面白いだらう、と五郎は思つた。胸がわくわくするほど楽しくなつた。清ちやんが、さうして長い長いトンネルを掘つてくれたらいい、さう五郎は熱心に思つてゐたが、そのうちに清ちやんは、何か外のこと氣を取られたのか、それとも掘るのに疲れたのか、やめてしまつた。トンネルは六七寸の深さに掘られたまま、そこに残つた。

清ちやんはどこかへ行き、そのトンネルの前に、五郎ひとりが残つてゐた。五郎は何か清ちやんの使つてゐた道具で、それを掘つて見たが、彼の力では、よく緊まつた赤土はとても掘ることができなかった。ああ、駄目だ、と思つた。その「駄目だ」といふ氣持は、どこまでもどこまでもトンネルを掘つて、この赤土の向ふ側へ穴を通して見たい、といふ計畫の夢みるやうな楽しさと、それを自分の手でやつて見ると、一寸の赤土も掘るのが難かしい、といふ事實との、残酷な衝突であつた。

彼はその衝突を、何か大變不合理な事のやうに思ひ、以後何か考へることで實行に骨の折れる場合にぶつかると、この時と同じ型の苛立たしさを感ずるやうになつた。どうして、自分の考へたことが

實現できないのだらう。この感じは、怒りのやうな、一種の新しい感情を、五郎の心の中に芽生えさせた。

五郎は空想癖の強いところがあり、空想することがすぐ實現されるやうに現實を無視しがちな性急癖があつた。それが先づこの時に、かういふ形で現はれたのであらう。現實を見る力の量よりも、見ただけの現實の上に築く夢の量の方が多い。この夢見がちな性格を、五郎は、後年、もつとも大きな自分の弱點として、幾度も反省しなければならなかつた。

五郎は空想癖に富む子供の常として、強情さがすでに芽生えてゐたのであらう。彼は父の折檻を受けた記憶が残つてゐる。その原因は何であつたか分らぬが、彼は夜、教室と住居との間を便所の方に續いてゐる廊下を、父に引きずつて行かれた。抵抗しても駄目だといふことを感じながら、その時、便所がよほど怖ろしい場所に思はれ、手足をばたばたさせて、連れて行かれまいとした。この記憶は、その前と後のことは、過去といふ闇の中に姿を消してゐて、その箇所だけが、節穴から洩れる光のやうに、ばつと浮き出すのである。

いくつかの、かういふ記憶の斷片を並べたものが、この分教場にゐるあひだの五郎の目に残つた人生であつた。三十五歳になる父の伍助は、この分教場での二三年の生活の間に、生涯をこの砂谷村の本村で過すことに心をきめた。彼は、ここから川そひに海岸に出た砂谷村の本村に土地を買ひ、家を建てた。そして、その家への移轉を機會に、教員をやめ、砂谷村役場に勤めることになつた。それは、彼の實生活に對する考が、徳助澤に來るまでの「靜かに暮したい」といふものとは大分變つて來たことを語つてゐる。

「靜かに暮す」ことを念願として、この山間の分教場を受け持つて見たものの、子供が三人四人と多くなり、ことに三番目の廣が病氣がちで、始終山を越えて小樽の醫師のもとまで通はなければならぬ

ことや、上の鈴子が學齡に達して來て見ると、設備の整つた學校や醫師のゐる人里で暮さなければならぬことを伍助は感じたのであらう。

ある日、さうだ、その日も赤土の山添ひの道に日が照つてゐたやうに、五郎には思ひ出される。彼は、荷物を積んだ馬車の後について、砂谷村へ出る道を歩いてゐた。疲れたらしいといふことで、彼は馬車の上へ抱き上げられ、ごとごと揺られながら進んで行つた。どういふ譯か、五郎の徳助澤での思ひ出は、日が赤い色の地面に照りつけてゐる場面が多い。砂谷村の邊は、耕土が浅く、下がすぐ赤土になつてゐるので、道路や崖はたいてい赤かつた。またその赤土の下は水成岩の黄色い層になつて、切り通しなどに露出してゐた。

しかし半年も深い雪に閉ぢこめられるこの山の中にゐながら、雪についての記憶がほとんど無いのは、冬のあひだ、幼な兒の五郎たちは、一切戸外へ出れなかつたから、自然に雪についての印象が残らなかつたのであらう。それともまた、人の記憶といふものは、人の心と同じやうに、暖かさと光との漂つてゐるところで育ちやすく、長い命を持ち續けるのであらうか。次の砂谷村での生活の記憶が、吹雪や、雪に埋もつた村道や、雪の消える春の氣配などに、深くつながれたものであるのは、五郎の生活が戸外の自然と村の人間生活の中へ次第にひろげられたからであらう。どういふ風にして、分教場の住居が疊まれたのか分らない。とにかく砂谷村へ行く山のなぞへの赤土の道を、何やら箱のやうなものを積んだ馬車が一臺進んで行き、父や母がその後から歩いてゐたやうである。それはしかと、生活の大きな變化だなどとは思はれず、どこかへ遊びに行く道すがらのやうで、五郎には樂しかつた。それまでも、五郎や鈴子は、父母から、いよいよ砂谷村に家が出来て引越すのだといふことを言はれてゐたにちがひない。それで、引越しいふ、生活が根こそぎにされるやうな事件も、やつぱり樂しい事として幼な心に感じてゐたのであらう。

その新しく建つた家は、南が國道に面し、五六間引込んだところにあり、裏は三間ほど間を置いて、三丈ほどの高さの赤土の崖になつてゐた。崖の下には、清水の絶えず溢れる浅い井戸があつた。その崖の上は、自家用の一段歩ほどのゆるい傾斜の畑になつてゐる。幅一間ほどの小川が東の方から崖の下を流れて來てゐるのだが、この屋敷につき當つて南に折れ、屋敷の東南の角で國道について西方に曲り、時々その國道の北側になつたり南側になつたりして、村の家並を貫き、十町ほど西方で海に注いでゐる。この川は徳助澤を流れる砂谷川よりずっと小さい、小樽へ出る道に沿うた川である。

家は東と南をカギの手に、流れの早い小川で圍まれてゐる。屋敷は南の國道から五六間奥に入つた所に建ち、その前が庭になつてゐる。土地は西隣の金子家から買つたものである。この畑を入れて千坪ほどの屋敷を、三十七歳の伍助は、ほぼ自分の生涯住む所と定めたのである。庭は南と東に大分廣くとつてあり、金子家に寄つた西側の百坪ほどは菜園になつて、キャベツや菜などが播かれた。

家は、南の正面に玄關があり、入ると二坪ほどの土間で、左手には八疊ほどの板の間があつて、爐が切つてある。その北側につづいて臺所があり、そこから裏の井戸へ出る勝手口に三坪ほどの土間があつた。この邊の家は冬期戸外を使ふことが出来ないで、土間を出来るだけ廣く作つておき、そこへ薪を積んだり、炭を置いたり、竈を置いたりする。便所はその土間を横切つて西北の隅にあり、下駄を穿いて行かねばならない。

子 供 暦
玄關を入つて右手には、東南に面した六疊の客間書齋があり、その北には八疊の居間があつた。その八疊と臺所とは、玄關のつき當りを左右に通つてゐる廊下でつながれ、その廊下の北側は、六疊は

どの北向きの納戸のやうな暗い室になつてゐた。

外から見ると、この家の特徴は窓にあつた。西側の板の間の南面には、この邊の漁村によく見る細かい格子のはまつた硝子窓が二間の長さ一杯についてゐた。しかし東方の座敷には、下の半分を上げ下げするやうになつた、幅二尺五寸ほどの、西洋風な、縦に細長い硝子窓が取りつけられてあつた。六疊の書齋の南に一つ、東に一つ、隣の八疊の居間の東に一つ、北に一つ、その窓があつた。

それは、伍助の好みで特に取りつけられたものらしかつた。二十歳の頃から陸軍教導團や近衛師團に入つて、長いこと下士官の生活を送り、二度戦争に出、戦後將校官舎にも住んでゐた伍助は、よく兵營などについてゐる、さういふ素朴な西洋風の窓に慣れてゐたので、自分の建てた家にそれをつけたのであらう。しかし、この窓は、力のない五郎や鈴子には、上げ下げするのに重くつて、大變不便であつた。それに幅が狭いので光線の入る量も少かつた。

この家へ一家は移つて來た。毎晩川のせせらぎが、家の東の方と南の方から聞えて來る。この邊は山が海にせまつてゐるので、川はみな流れが早く、この幅一間ほどの小川でも、かなり高い音を立てた。それに豪雨があつた時や雪消えの季節などには、高さ四尺ほどに築いた石垣を越えて水が道路に溢れるやうなことがある。

晝間は忘れてゐるが、夜寢床に入ると、深さ五寸ほどで、あちこちに石が出てゐるその流れの音が、絶えず耳もとに響く。そして、それから以後、五郎たち兄弟は、この水の音を聞きながら育つた。晝間はその川は、五郎たちの遊び場である。蝦に似たザリ蟹といふのが、石をめくると下にひそんでゐる。二分か三分ほどの小さいのから、二寸ぐらゐの大きなまでゐた。また川カジカやゴタロウといふ小魚がゐて、釣ることが出來た。芳子はこの家へついて來て、女中として働いてゐた。

その家へ越して來たはじめ、五郎は、近所隣の多いこの新しい世の中に、しばらく當惑してゐた。